

おわりに

若松 茂

高等専門学校用教材「生物」の開発は、専門の教師を得にくい分野での授業代替型のビデオパッケージ教材として前例のない試みであった。

その開発には、試作や授業実験による評価をふくめ、全25巻（「基礎生物」10巻、「生命科学」15巻）のビデオ教材と印刷教材の完成に正味3年余を要した。

とくに留意した点は、第1に対象を化学系の学生に限らず、非化学系の学生も対象としたことで、教材の一般的 content 水準や構成、また提示方法に多くの検討が重ねられた。第2は、教材作成の目的が、第1義的には教室での一斉授業での利用におかれたため、印刷教材については、ビデオ教材を補完するだけでなく、“一過性”で部分的な反復視聴が困難な、教室授業でのビデオ教材の復習にも役立つような、スタンドアロン型の教材が望ましいことが授業実験の結果などから明らかになり、このため、学生に日頃接して学習条件を理解でき、また教授する立場をもふまえて、高等専門学校の現職教官からなるワーキンググループ（専門部会）によって印刷教材の作成をおこなったことである。

本教材は昭和63年度に全国立高等専門学校に配布され、授業への試用が進められている。教官の使用記録や、学生の学習状況についての予備的調査の結果については、本報告書の第4章で取り上げた。正規カリキュラムへの本格的な採用は今後の問題であり、多数の学校での積極的な利用を期待するとともに、今後の教材開発のための卒直な意見や感想をいただければ大変幸である。

なお、「生物」で新たに試みられた、現職教官ワーキンググループによるビデオパッケージ教材の作成方式は、現在進行中の「新素材」にも引きつがれ、一つの方式として定着しつつあるように思われる。

最後に本教材について、放送教育開発センター『十年のあゆみ』（昭和63年10月）に寄稿された慶伊富長国立高等専門学校協会会長の一文をここに再録して、本報告書の総括としたい。

高専用ビデオ教材「生物」を前にして

センターが3年半かけて制作して下さった高専用映像教材「生物」が本年3月各高専に配布された。生命科学編15巻、基礎生物編10巻、印刷教材2種からなる教材は素晴らしい出来ばえである。沼津高専では早速4月から全一年生に対する「生物学」の授業を開始した。電気、電子制御、機械の学生が化学の学生に劣らぬ興味を示しているという。この成功によって、「生物学」を基礎とする生物工学教育を本格的に取り入れる準備が整ったので、沼津高専では工業化学科の改組を文部省に要望する運びとなった。同様の要望は富山、小山など7高専からも提案される。高専用のビデオ教材の完成は高専教育に大きなインパクトを与えることになったといえる。